

受賞者記念コンサート

日時 2019年10月19日

会場 杉並公会堂大ホール

台風19号が都内を直撃したことにより、開催が危ぶまれていた「ベヒシュタイン室内楽コンクール」だったが滞りなく開催することが出来、合計35組が参加した。

10月14日にはアマチュア部門、プロフェッショナル部門通過者の本選が行われることになり、10月19日には各部門の入賞者、計7組の演奏、及び4人の審査員による演奏が杉並公会堂大ホールで行われた。

ヴァイオリンとピアノ。クラリネット、フルート、オーボエそしてピアノの木管トリオ。ピアノ五重奏等多種多様な組み合わせ。曲目もモーツァルト、ブラームス、シューマンといったものからグリーグ、ジャン・ミシェル・ダマーズといった作曲家もありバラエティに富み、いずれも質の高い演奏を各組が披露していた。

聴衆の一人として今回の演奏を聞いて感じたことがある。ベヒシュタインの音はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロといった個々の楽器のサウンドを決して消さない。しかしながら、きちんと音が浮かび上がってくる。それにより和声等が浮かび上がって全体が立体的に聞こえてくるのだと改めて認識できた。

それによってロマン派の色彩感、フランスの作曲家の色彩感、北欧の色彩感など様々な和声感を体験できる貴重な体験となった。

また出場者の方々の音楽を聞いて、あるワードが脳内に思い浮かんだ。それは「主張」と「対話」である。西洋音楽というのはおしゃべりと対話のフレーズが多数出てくるので決して避けては通れない題材である。

人生の中で様々な人と出会い、世間話や議論等を行うことで多種多様な発見をしていくことができる。だがそれらは一個人の主張やエネルギー無くして生まれることはない。主張同士がせめぎあい、そのバランスを取る過程で初めて「対話」、それらを深めていくことによって「調和」が生まれてくる。さらには人々を納得させる「芸術」に至るのではないだろうか。そういった経験を出場者の方々は今回のコンクールの練習の過程でされてきたことと思う。

コンクールに参加された方々、審査員の先生方、聴衆の皆様、そして共催の杉並公会堂の皆様がこの度のコンクール及び演奏会を無事開催できたこと、機会を通して様々な気付きを与えて下さったことに感謝の意を述べたい。

(文責：鈴木)